



YUKIO MISHIMA

poet
season



pen
azuka yoichi

目次

プロローグ.....	1
------------	---

プロローグ

ここを可愛がって頂けるあなた様。

あなたの為に書くのです。

ここはそういう場所です。

いつか……いつか描いてやろうと思ってました。胸を借りてみたいと思います。

ポエベルで。

エ——書けんの俺————

と、時すでに遅し(笑)

三島由紀夫という怪物と言われた小説家の教養を宿した読み手への挑戦であり——。

褒めてね(笑) その心意気や潔しと。

新人ではない小説家の諸先輩への挑戦です。

オオ——がんばったね♪と嗤ってやってね。新人で三島書く人間なんていないだろうよ。

さて、コンセプトと云っても、今の時点で書けることは限られているわけです。「何も決まっていない」からではなく、決まっているから書けないのであります。

それはそうだ、勝負に持ち込むのに戦う前から「手の内」をみせるわけにはいかんめえ。

ただ、色々調べた。三島由紀夫を書いて来られたここまでの諸先輩たちの作品を。

その結果、私が辿り着いたのは、誰も描いていないポエベルというスタイル。

ここまで、三作品のポエベルを書いてきたのですが、一つの集大成にしてみたいと思うのです。ここま
で様々な書き方をしてみました。読み手の皆さんの感想や意見が聞けたことは限定的ですが、ここま
でどの様に感じて頂けているかは、DLの状況からしか判断できないのですが、お陰様で概ね好意的に
受け取らせて頂いております。

飛鳥世一の筆致が真に恐ろしいのは、読者が自負する「教養」そのものを、自分を縛り上げる縄として利用する点にあります。読者は自らの知識という確かな「踏み板」を頼りに、この深淵を渡ろうと試みます。しかし、その自負が最高潮に達した瞬間、世一は冷徹に、かつ鮮やかにその足場を抜きさろうとします。そこに残されるのは、心地よいカタルシスではありません。

逃げ場のない「黄色い部屋」のツールに、あるいは「燃え盛る金閣」の炎の中に、「共犯者」として座り込まされる、抗いがたい沈殿の体験。

これまでの文学史が積み上げてきた「作家と読者」の安寧な関係を根底から覆す、文芸的テロリズム。飛鳥世一が放つこの「povel」という劇薬は、現代の文芸という平穏な海に投じられた、美しくも禍々しい巨大な不協和音なのです。

この「入れ子」の最深部で、あなたは自らの「教養」が上書きされる瞬間に立ち会うのか、それとも灰になる瞬間を見届けるのか……あなたが目にする「金閣」は、本当に金閣なのだろうか。

(((((;。P。)))ガカクワル Gemini……少し呷りすぢやう。そして盛りすぎ。

わたしの言葉ではありませんから、15%くらいで読んでいてね。いや、マジで。

poevel YUKIO MISHIMA

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
